

報告番号

香大医博乙 第 276号

学位論文の内容の要旨

氏 名

米 田 有 美

論文題目

Effects of Makeup Application on Diverting the Gaze of Others from Areas of Inflammatory Lesions in Patients with Acne Vulgaris.

(論文要旨)

[背景]

痤瘡の皮膚科診療において、ファンデーションなどの化粧（メイクアップ）は皮膚症状を悪化させるものとして、使用を中止させる医師の指導がこれまでおこなわれてきた。特に顔面に皮疹のある痤瘡患者において、その症状を他人の目に触れさせること、また身だしなみをしてメイクアップができないことが大きなストレスになり、Quality of Life (QOL) を著しく低下させていた。最近、白斑や外傷性瘢痕など難治性あるいは完全に治癒することができない皮膚症状に対してメイクアップを施し目立たなくすることや、アトピー性皮膚炎や痤瘡患者への皮膚科医によるメイクアップ指導が患者のQOLを向上させることが報告されている。これは、それまで医師から止められても隠れておこなっていたメイクアップを許可されたことに対する安堵感に加え、実際のメイクアップの機能として皮膚の色調差や皮疹が目立たなくなり、さらに、目もとや口もとを華やかに装うことで相手の視線が皮疹などから目もとや口もとなどに誘導されることを患者が認知するものによると考えられる。しかし、他者の視線が実際に皮膚症状からどのくらい他に誘導されるか、また効果的なメイクアップについての検証はこれまでなされていない。

[目的]

本研究では、メイクアップ（ベースメイクおよびポイントメイク）の顔面の痤瘡皮疹に対する他者の視線の集中を軽減する効果を検証するために、尋常性痤瘡患者に対してメイクアップをおこない、画像によるアイトラッキング分析をおこなった。

[方法]

顔面に皮疹を有する20代女性の尋常性痤瘡患者2例（中等症：A，軽症：B）を被験者とし、中等症のAに対してはベースメイクとポイントメイク，軽症のBに対してはポイントメイクを施した。それぞれの施術の各段階において写真撮影をおこない、画像中の顔面の大きさや明るさなどの補正をおこない、メイクアップ以外の相違がない画像を観察画像とした。観察画像4枚をランダムに各8秒間（各画像間に2秒のインターバル）画面に映し、男女合わせて22名に観察させ、視線の動きをアイトラッカーによって記録した。観察者の視線の動きを痤瘡皮疹への「注視するまでの時間」，「総注視時間」および「注視回数」として算出した。

【結果】

ベースメイクについては施術が進むとともに、注視するまでの時間は増加、総注視時間および注視回数は減少する傾向が認められた。メイクアップをおこなっていない状態とベースメイク完了時を比較すると、総注視時間が有意に減少した。また、ポイントメイクについては、Aではメイクアップをしていない場合と比較して、注視するまでの時間、総注視時間および注視回数が有意に変化した。ベースメイクのみの場合との比較では、リップメイク（口紅）をした場合に総注視時間で有意な減少が認められた。Bではポイントメイクによって注視回数が有意に減少した。

【結論】

ベースメイクによって総注視時間は有意に減少し、さらにポイントメイクをおこなうことで注視するまでの時間、総注視時間、および注視回数に変化が認められた。顔面に皮疹を有する尋常性痤瘡患者に対してメイクアップをおこなうことで、痤瘡皮疹への他者の視線の集中が軽減することが明らかとなった。

尋常性痤瘡だけではなく、アトピー性皮膚炎など顔面に皮膚症状を有する皮膚疾患の治療においても、皮膚科医が症状を確認した上でメイクアップをおこなうことは、患者の安心感につながり、治療上有用であると考えられる。

掲載誌名	Journal of Cosmetics, Dermatological Sciences and Applications 第 5 巻, 第 2 号		
(公表予定) 掲載年月	2015 年 6 月	出版社(等)名	Scientific Research Publishing Inc.
Peer Review	有 ・ 無		

(備考) 論文要旨は、日本語で1, 500字以内にまとめてください。